

戦争犯罪裁判と被告人

——戦犯と中国の戦争被害——

宇田川 幸大

目 次

はじめに

1. 刑死者と裁き

- (1) 敗戦という現実
- (2) 裁判と日本軍隊への疑問
- (3) 浮かび上がる日中戦争の一断面
- (4) 「日中親善論」と戦争への回顧
- (5) 変わらざる認識と「課題」——天皇・天皇制，対アジア認識，「復讐戦」

2. 「事件調査票」にみる裁判

- (1) 命令への服従と上官への疑問
- (2) 戦争と戦争裁判の同時否定
- (3) 国家補償の要求をめぐる
- (4) 「被害者の声」との接点
- (5) 思索を阻むもの

おわりに

はじめに

1924万4553人——。これは、中国側が戦後初期の段階でまとめた、日中戦争期における中国側死傷者の数である¹⁾。中国は、近代日本の戦争のな

1) 伊香（2007）260頁を参照した。なお数値は、「軍人（国民政府の統計による）」、「中国共産党軍」、「国民党支配地域市民」、「7解放区の市民」の死傷

かで、膨大な犠牲を払わされた。戦争の過程では、住民虐殺、捕虜虐待、性暴力など、日本軍による数多くの戦争犯罪が生じている。中国での戦争犯罪は、極東国際軍事裁判（東京裁判）と、各地で開催された BC 級戦犯裁判で、その一部が追及されることになった。

1970年代以降、旧連合国での資料公開が開始され、対日戦犯裁判にかんする多くの事実関係が明らかにされるようになった。連合国側の裁判政策が詳らかにされ、各裁判の具体的な審理内容も検討されるようになった²⁾。中国についても、その政策決定や犯罪調査の内容が明らかにされつつある³⁾。こうした流れのなかで、裁判記録や連合国側の政策文書を使用しつつ、「裁判は不当」「裁判は一方的」といった、「当事者目線」（「戦犯目線」）の裁判論を見直そうとする機運が高まった。被告人のいい分だけを鵜呑みにして、裁判を論じるのは危険である。公開された裁判記録を、綿密に読み解く作業が、今後也不可欠である。

だが一方で、被告人の意識分析——裁かれた者は裁きをどのように考えたのか——は、先に触れた諸研究に比べて、大きく遅れている⁴⁾。筆者は、完全な「当事者目線」に基づく裁判論は危険だが、裁かれた戦犯の声もまた、重要な歴史研究の対象であると考え。裁かれた者は、いったい戦争

者数の合計である（同上）。

2) 大沼（1975）、清水（2011）、栗屋（1989、2006）、吉田（1992）、宇田川（2016）、日暮（2002）、戸谷（2008）、難波（2011）、林（2005、2010）など。

3) 伊香（2014）、和田（2001）、豊田（2009）、宋（1993）など。なお、中国での東京裁判研究については、宋（2016）に詳しい。

4) もちろん、被告人の意識分析が全く行われてこなかったわけではない。先駆的な研究では、鶴見（1968）がある。近年のものでは、宇田川（2012）、内海（2015）、内海・宇田川（2016）などの研究がある。こうした研究によって、スガモプリズンの「平和グループ」や、東京裁判の被告人の戦争観などが明らかになってきている。しかし、他の大多数の戦犯についての検討は遅れている。

裁判をどのように考えていたのか。自身が戦犯となる根本原因となった、日本の戦争をどう考えていたのか。これは、戦後、そして現在の、戦争責任論を考える上でも、重要な知見と示唆を与えるはずである。

特に、「被害を受けた側」による裁きを、裁かれた者がどう考えたのか、という問題は重要である。被害者の痛覚や視点を、日本側はどのように受容あるいは拒絶してきたのか。これは、現在の「日本—他のアジア」の関係を描く上で、不可欠の作業である。筆者が、中国の戦犯裁判の被告人に着目するのは、そうした問題意識に基づく⁵⁾。巨大な被害をこうむった中国の裁きを、被告人はどのように捉えたのか。そして、彼らの意識からは、日本の戦争や戦争裁判の、どのような特徴や問題点が浮かび上がるのか。これらが本稿での検討課題である。

なお今回は、関係者の遺書や「事件調査票」（各資料の詳細については各項目にて後述）といった関係資料が体系的に残されている、中国国民政府の戦犯裁判の被告人を分析対象とする。中華人民共和国の行った戦犯裁判の被告人については、岡部牧夫・荻野富士夫・吉田裕編『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』（岩波書店、2010年）などの諸研究を参照していただきたい。読みやすさを考慮し、一次資料の引用に際しては、旧漢字を新字体に改めるなど、適宜修正を加えている。〔 〕は筆者による注記を、「／」は改行されていることを示す。

1. 刑死者と裁き

刑死者たちは中国による戦争裁判をどのように受け止めたのであろう

5) アジア諸国・諸地域のなかで、自ら戦争裁判を開催できたのは、中国とフィリピンであった。フィリピン裁判の検討は今後の課題とさせていただきたい。なお、中国国民政府の戦犯裁判は以下の地域で行われた。北京、広東、台北、南京、漢口、徐州、済南、太原、上海、瀋陽。

か。以下では、彼らの意識の一端を、巣鴨遺書編纂会編（1953）『世紀の遺書』（巣鴨遺書編纂会刊行事務所。1984年に講談社から復刻。以下、引用は復刻版による）から浮かび上がらせてみたい。『世紀の遺書』は、戦犯の遺書を収めた、800頁に及ぶ大書である。収められた遺書の総数は701篇、刑死者の約75%にあたる数である⁶⁾。

（1）敗戦という現実

裁判の受け止め方のうち、最も多くみられるのは「敗戦の犠牲である」というものである。

1947年8月、広東で刑死した岩広一二（元輜重兵伍長）は、自身への判決を「全く事実無根の誣告を採用せる中国側の一方的なる裁判の結果」であるとして、次のように述べている。

幾度か生死の間を彷徨し乍らも祖国をたつ日の感激を胸に必勝を信じて戦ひましたが空しく敗れて聖戦は侵略に、皇軍は軍閥と呼ばれる世となり御奉公が仇になり冤罪に刑場の露とならなければならぬ様な皮肉な運命になりました。致し方ありません。敗戦の犠牲です⁷⁾。

敗戦の結果として、裁判や自身の死を捉えた者は多い。「服務中部下の取扱いたる事件又は小生の全く夢想だにせざる事件を持出して、之の責任者として責任を転嫁せられたるものであります。〔中略〕国に奉公致したる所以であります。敗戦が原因であり、又運命でありませう」（大庭早志・

6) 『世紀の遺書』については、内海（2004）、東京裁判ハンドブック編集委員会編（1989）143頁を参照。なお、BC級戦犯裁判における刑死者の総数は、934人である（林（2005）61頁）。

7) 巣鴨遺書編纂会編（1953）84-85頁。

元憲兵曹長）、「敗戦ノ犠牲ニテ遂ニ死刑執行セラル。事茲ニ至ツテハ何等言フベキ言葉ナシ」（芝原平三郎・元中国寧波情報部主任）、「不幸にも処刑されるに至った根本原因は『敗戦』の二字に尽きる」（大場金次・元憲兵大尉⁸⁾）。以上のような所感が、『遺書』には数多く記されている。

一方、「敗戦の犠牲となった」という感覚とともに、「新日本建設のための礎」という見方をもつ者もあった。広東で刑死した、兼石績（元海軍大尉・文昌派遣隊長）である。兼石は、裁判が自身の着任する前の事件を問題にしたと指摘、「事実無根の罪を押付けられました事は無念の極みです」と書いている。一方、死の意味については、「然し敗戦日本の現状より見て復興と新日本建設のためには少からざる犠牲は止を得ざる事と決意し居る次第です。〔中略〕私は無条件降伏下日本民族守護の代償、再建日本の礎として又部隊長の身代りとして行く」と記している⁹⁾。敗戦という現実と同時に、「戦後日本」を展望しつつ自身の死の意味を問うている。

また、「敗戦の結果」という感覚を抱いた者のなかに、いわゆる「漢奸」への同情心をもつ者が存在したことにも触れておく必要がある。「漢奸」は、中国人で対日協力・対日通牒などを行った者とされ、中国側（中華民国、中華人民共和国）が開催した「漢奸裁判」で厳しく追及されていた¹⁰⁾。上海で銃殺刑に処せられた、田島信雄（元憲兵曹長）は、漢奸への死刑執行を耳にして、次のような所感を述べている。

何百名かの漢奸こそ吾々戦犯と同じ境遇なのだ。戦時中日本軍に協力し或は日本軍の為に働いた中国人が日本の敗戦により囚徒となり漢

8) 同上, 11, 32-33, 60-61頁。

9) 同上, 38-39頁。

10) 東京裁判ハンドブック編集委員会編（1989）126-130頁を参照。なお、漢奸裁判については、劉傑（2000）などの研究がある。

奸の汚名を負ひ現在苦しい煉獄生活をして居るのである。

我々戦犯は国敢れて其の犠牲となるも国家と云う大きな背景があるが、漢奸には何もその点がないだけでも淋しいものであろう¹¹⁾。

「同じ境遇」としてくくることには、いささか問題があろうが、日本の戦争に動員された「他者」への視点が現れ始めている記録として読むこともできるかもしれない。田島の指摘する「国家と云う大きな背景」が、「対日協力者」にとっていかなる存在であったのか、これも重要な論点である。戦犯裁判は、戦時における「対日協力者」の問題とも複雑に絡み合うものであった。

(2) 裁判と日本軍隊への疑問

裁判への不満を記した者は極めて多い。なかでも、自身のいい分を充分に聞いてもらえなかった、という声は根強い。「不当の裁きをした裁判官を始め捏造せる偽証に依り私を罪に陥入れた告訴人並証人等」を恨んだ(久保江保治・元憲兵准尉)、「無実の罪を押付けられ」た(鮫島宗義・元陸軍伍長)、「戦犯制度は将来に於ける戦争予防を以て目的となすと雖も是単に表面に過ぎずして実は戦勝国の戦敗国民に対する報復制度たるに過ぎず。故に最も証明力を有する物的証拠も顧みられず専ら中国人の証言により審判された」(白鳥吉喬・元陸軍嘱託)¹²⁾、戦犯たちの手記には必ずといってよいほどこうした記述が登場する。軍事裁判の目的は、被告人の人権擁護ではない。その目的は軍の秩序維持にある。彼らの声は、そうした軍事裁判の特徴を端的に示すものであるともいえよう。

ところで、彼らの証言や裁判の意義を考える上で重要なことは、裁判の

11) 巣鴨遺書編集会編(1953) 21-23頁。

12) 同上, 25, 26, 67, 80頁。

不当性を訴える声が強かった一方で、責任逃れをした元上官など「裁かれざる責任者」への怒りも同じくらい激しかったということである。例えば、堀本武男（元陸軍大尉）はこう記す。

当地に於ける戦犯者は殆んど捏ねられたる罪で小生の如く全く関係なきもたま―その土地に居たとか全く事実無根の事柄をデッチ上げて居るものが多く、又其の大部分が下級将校及び下士官中上官の命を奉じて直接事に当りし者で、当然の責任者たる上級幹部の少きは全く遺憾なる事にして内地に於ける国民の戦犯に対する感情は如何にあるかなれど此等の人々を悪しざまに考ふるは誤りにして、かへつて当然罪におつと思はれる人の無事内地に帰還しあるはなげかはしき事なり¹³⁾。

堀本の所感は、裁く者への不満と、問われることなく日本に帰還した、上級者たちへの怒りが、並置されている点が印象的である。他にも、「事件取扱者が現在悉く居りませんため、芳雄が全責任を負はせられた様な次第」（松本芳雄・元陸軍曹長）と書いているものもある¹⁴⁾。

石上保（元憲兵軍曹）も、上官たちへの激しい怒りを記した1人である。石上はこう述べる。

日本軍隊の最後も実にみじめなものでした。吾等の上級者として今日迄指揮して来た連中も終戦と共に責任を免れる為逃走したり或は部下たる兵卒、下級士官にその責任を負はしめ己は平然として帰国して行つた。

13) 同上、57-58頁。

14) 同上、87頁。

亦帰国に際しては凡て虚偽の口説を残して其の場をつくろつて行つた。こんな矛盾な指揮者は他にあるか。日本精神の教育をして軍隊解散の最後の振舞はこんなことで終るのだろうか。思へば軍隊の幹部の行動は死んでも忘れることの出来ないものとなつて来ます。今どんな生活をして生きて居るやら亦生を世にする価値あるでせうか。

〔中略〕日本の侵略行為に対する中国の仇は今此の吾々数百名に肉体的苦痛となつて遺憾なく示されて居るのです。

己の一身は今此の地に散つて行くはいとわないが来たるべき日本建設には嘗ての軍国主義者の策動は断じて許すべきものにあらざるを宣言したいのです。自由解放となるべき国家の建設に協力して下さい¹⁵⁾。

無責任な上官たちの代わりに、中国侵略の責任をとらされた。これが石上の率直な受け止め方だったのではないだろうか。石上にとっての「来たるべき日本建設」は、軍国主義者の排除を前提とするものになってゆく。戦犯の「不当な裁き」という見方には、裁く側への不満だけではなく、「責任者なき裁判」への怒りが含み込まれていた。戦犯裁判は、戦犯たちが日本軍隊のもつ矛盾や問題点と、向き合う契機となるものでもあった。

(3) 浮かび上がる日中戦争の一断面

日中戦争が、「宣戦布告なき戦争」として拡大したことはよく知られている。アメリカの中立法適用を恐れ、日本側は戦争を「支那事変」と称していた。「事変」において、戦時国際法は適用されるのか、このことが当然問題となった。日本陸軍では、捕らえられた中国軍捕虜を「各級指揮官

15) 同上, 75-76頁。

の責任」で処理することとし、国際法上の捕虜としては扱わないという方針が採られている。日中戦争が勃発した際、俘虜情報局や陸軍大臣が管理する捕虜収容所は設置されなかったのである¹⁶⁾。このため、中国人捕虜の処遇は極めて曖昧かつ危ういものになった。

こうした捕虜政策の問題性が、『世紀の遺書』でも露わになっている。済南収容所長としてその責任を追及された、青井真光（元陸軍中尉）はこう記す。当時、一少尉として窮屈な規定に縛られ、命令に応じてやっていかなければならなかった。戦争中、物資は窮迫、人的資源の不足も介在し、常時1000人から3000人の捕虜を擁して給与、衛生について完璧を期するのは極めて困難だった。「日本ハ事変トシテ戦争ト認メテオラズ從而俘虜ノ取扱ヒノ如キモ万国公法ガ根拠デナク別ニ規定ガ制立サレテ居テ万般実施シタノdeal」¹⁷⁾。青井は以上のように述べている。青井によれば、裁判では捕虜の病死や「勞工」への従事が問題とされたが、日本軍の「命令規定」や「規定ニ基クコト」は、考慮されなかったという。「勞工」は「軍作命」に基づくものであったが、青井の責任だとして追及がなされたのである¹⁸⁾。

日本軍の捕虜政策——国際法とは逸脱した方針による戦争遂行——は、多くの戦争犯罪の原因となっただけでなく、多くの戦争犯罪人を生み出す原因にもなっていた。

(4) 「日中親善論」と戦争への回顧

刑死者のなかには、日中親善を求める者や日本の戦争への思索を進める

16) 日中戦争時の捕虜問題については、内海（2005）、内海・宇田川・カプリオ編集・解説（2012）を参照。

17) 巣鴨遺書編纂会編（1953）43-44頁。

18) 同上、44頁。

者もあった。広東で刑死した、野田毅（元陸軍少佐）もその1人である。野田は、日本の戦争について「日本が大東亜戦争を始めた時は最悪の敗戦を考えてやつたらうか、だから現実に直面した時に驚くのだ」と疑問を投げかける。そして、野田の思索は「日本の戦争」に及んでゆく。「つまらぬ戦争は止めよ。曾つての日本の大東亜戦争のやり方は間違っていた。独りよがり、自分だけが優秀民族だと思つたところに誤謬がある。日本人全部がそうだったとは言はぬが皆が思ひ上つていたのは事実だ。そんな考えで日本の理想が実現する筈がない」。一方、自身の死の意味についてはこう記す。「我々の死が中国と日本の楔となり、両国の提携となり、東洋平和の人柱となり、ひいては世界平和が到来することを喜ぶものであります」¹⁹⁾。

「事実なき事」を裁かれた、という自身の境遇と、戦争中、中国の人びとが置かれた境遇とを重ね合わせた者もあった。高橋久雄（元陸軍軍属）は、「事実なき事も良民殺害」の罪名で裁かれる、と書いた上でこう続ける。「中国としても満洲事変以来私の如き境遇にあり泣いて死んで行つた人達も大勢あつたことでせう」、「中国とは今日迄不幸な関係にありました国民全部が民族愛に真心を以て第一歩より踏み出し交はられん事を願ふ。これが将来日本の為ばかりでなく民族の幸福であると痛感するのです」²⁰⁾。高橋の見方は、中国の人びとの受けた被害を視野に収めつつ、日中関係の発展を展望している点で、特色があるものだった。野田と高橋のほか、『遺書』では、「東亜の和平、中日親善に付て将来必ず一致するを信じて従客として死に就く」（兼石續）、「中日提携の捨石。世界平和の先駆」（坂本春吉・元「満洲国」警察官・満鉄社員）といった記述がみられる²¹⁾。しか

19) 同上、1-2、4頁。

20) 同上、34頁。

21) 同上、40、92-93頁。

し、「敗戦の犠牲者」との見方が支配的ななかで、こうした「親善論」を述べた者は少ない。刑死にいたる限られた時間のなかで、被害者の視点に触れ、友好・親善を展望するのは極めて困難だった、ということなのかもしれない。

（5）変わらざる認識と「課題」——天皇・天皇制，対アジア認識，「復讐戦」

戦前・戦中から継続する「課題」や、裁判後に生じた新たな「課題」が存在したことも、指摘しておく必要がある。ここでは3つの観点からこのことを確認しておこう。

1つは、天皇・天皇制への「信仰」が揺らがなかったということである。このため、天皇・天皇制、「日中親善」、そして「アジアの平和」が、混然一体となったケースが生じることになる。先に確認した野田毅は、日中親善を強く訴えつつ、一方で、「天皇陛下万歳！／中華民国万歳！／日本国万歳！／東洋平和万歳！／世界平和万歳！」と記している²²⁾。松谷義盛（元憲兵軍曹・杭州憲兵隊）も、その遺書のなかで「大亜細亜万才／大中華民國万才／日本万才」と書き、「皇国の為に散る」と自身の死を意義づけていた²³⁾。

こうした「友好論」を「人類愛」にまでつなげて思索する者もいた。太原で刑死した白岩定夫（元陸軍大尉）である。白岩は、「将来何んと言つても中国とは手を握つて相協力して行かねばならぬ日本の状況であります」とした上で、以下のような所感を記している。

22) 同上，2頁。

23) 同上，40頁。なお、「中国を第二の故郷として大日本帝国再建を祈る」（小場安雄・元陸軍兵長）と記した者もあった（同上，36頁）。

私が最後に内地の皆様にお伝へ致し度きは私が斯くの如き結果に陥つたからとて決して友邦中国を恨むが如き事無く、今後益々中国の理解提携に努力され、そして上は陛下の聖旨にお諭しの如く人類愛の完成に向ひ貢献されんことを切に懇願致します²⁴⁾。

「陛下の聖旨」と「人類愛」の語が同時に含まれた「日中提携論」である。こうした議論は、天皇・天皇制の存置を多くの人びとが支持していた日本社会において、受容されやすいものであったろう。だが、「侵略された側」、「天皇の軍隊」と呼ばれた日本軍に蹂躪された中国の人びとから見た場合、このような「友好論」はどう映るのか。そうした論点は、多くの戦犯の議論から欠落していた。

第2に、中国への強い反感を記した者があったということも見逃せない。上海で銃殺刑に処された、中野久男（元憲兵曹長）はこう述べる。

日本人の常識では到底想像も出来ない様な事を平気でやり、中国人はそれでなんとも思わないのだからたまらない。文化の程度の低い者から裁かれなくてはならないのだから、なんと言つてもどうにもならない²⁵⁾。

「文化の程度の低い者」との意識である。戦前・戦中から根強く存在していた、日本の対アジア認識が、根強く残存していたことが窺える²⁶⁾。

24) 同上、35頁。

25) 同上、17頁。

26) 戦犯が中国への反感を強めた1つの要因として、収容中に施された「足枷」の問題がある。市川正（元憲兵大尉）は次のような所感を残している。「これが戦勝国？ 文明法治国？ 世界何れの国に於て今日斯る非文明的な十八世紀の遺物足枷を用ひる国があるだらうか。余等は何と籤運の悪い星の

第3は、戦勝国への復讐を企図する声があがったということである。近藤新八（元陸軍中将）は、「私の真の魂魄は天翔つて此の敗戦の復讐を遂げねば満足しないのである」と、その怒りを吐露している。さらに近藤は、「皇国再建とは何か米国を亡し支那を平げることである。再建を只単に戦前の日本に復興する位に考へてゐては真の再建とは言へない」との認識を示す。こうした認識から導かれる近藤の見方は、「真の皇国再建は復讐戦に勝つことであることを深く念頭に刻み付けて貰ひ度い」というものであった²⁷⁾。戦犯裁判は、被告人の思索を促した側面をもっていた反面、裁いた者への不満や怒りを増幅させるという側面も有していた、といえるかもしれない。

2. 「事件調査票」にみる裁判

次に、有期刑や無期刑などになった人びとの認識を検討しよう。彼らは収容所のなかで長い時間をかけて、いかなる裁判観や戦争観を抱いたのか。ここでは、国立公文書館に所蔵されている『BC級戦争裁判事件調査票』（法務省司法法制調査部『戦争犯罪裁判関係資料』所収）を手掛かりとして考察を加えてみたい。「調査票」は、1953年に「戦犯釈放特使」派遣の声に応じ、日本弁護士連合会内の「戦犯釈放特別委員会」の求めによって服役者各自の作成が開始されたものである²⁸⁾。「調査票」には、起訴された内容、事件の真相、弁護方法、裁判への所見といった、記入項目が設けら

下に生れたものか。香港で戦犯になつてゐたらまさか英国さん、こんな足枷を用ひはしないだらうと今にして悔まれる事おびたゞしいが、然し現実には死刑囚と無期徒刑者は一律にこの桎梏を甘じなければならない。これが現実の戦犯の姿なのであるから何と云つても仕方がない」（同上、52-53頁）。

27) 同上、51頁。

28) 法務省司法法制調査部『BC級戦争裁判事件調査票・英国』国立公文書館所蔵。

れている。事件の真相や弁護にかんする項目などで、戦争犯罪の実態が詳しく記されているケースもある²⁹⁾。

「調査票」の作成は、2つの担い手によって行われている。1つは、スガモプリズン（平和条約発効後は、「巣鴨刑務所」）の運営委員会である。作成開始時期は、サンフランシスコ平和条約発効後、対象者は「すがも」の在在所者であった。もう一方の担い手は、法務省である。戦犯裁判終了後、法務省参与として、戦犯裁判にかんする資料の収集を担当していた豊田隈雄（元海軍大佐）によれば、「被告自身も〔裁判〕記録の一部を持ち帰ったり、日記をつけているものがあった。被告、弁護人のほかに通訳、教誨師等も部分的に裁判の記録を持ち帰っていた者もあった。そこで昭和三十一年秋に『調査表』を作成してこれら関係者約三千三百人に発送したところ、約半数が回答を寄せた」とのことである³⁰⁾。法務省によって作成された「調査票」はBC級戦犯裁判の資料収集の意味ももっていた。

今回、分析対象としたのは、中国国民政府の裁判を受けた122人の「調査票」である。中国国民政府の裁判で無期刑、有期刑、無罪、「その他」（未逮捕、不受理など）にあたる者は734人³¹⁾、「調査票」で網羅できるのは全

29) 詳しくは、宇田川（2012）を参照のこと。なお日中戦争関係では、日本軍の毒ガス戦に言及した「調査票」がある。ある元陸軍少将は次のように記している。「ガス使用については、実際には在支部隊の殆どがガスを使用している状況であったが一切その使用を否定した」（元陸軍少将（1958）「戦争裁判事件調査票」法務省司法法制調査部『BC級戦争裁判事件調査票・中国』国立公文書館所蔵）。本節で使用する「調査票」は全てこの簿冊に所収されている。（以下、簿冊名・所蔵機関の表記は省略。）また、「調査票」の氏名欄には、公文書館側の黒塗りが付されているので、以下では氏名の代わりに事件当時の階級を記す。

30) 豊田（1986）471-473頁。

31) 法務省司法法制調査部（年不明）「(B・C級)中国戦争犯罪裁判結果表」『中国戦争裁判概見表』国立公文書館所蔵。

体の約16.6%ということになる。この資料で彼らの意識の全容を描くのは難しい。だが、現在利用できる資料のなかで、最も体系的な資料群である。

（1）命令への服従と上官への疑問

「上官の命令に従って行った行為が、裁判で追及され厳しく罰せられた」、
「日本軍で命令は絶対だった」。こうした所感を記した者は多い。また同時に、上官が裁かれず、命令に従っただけの自分が裁かれるのはおかしい、という記載も多い。広東裁判で追及された元陸軍上等兵は次のような見解を記している。日本軍では、特に上司の命令が絶対だった。その上司は敗戦と同時に命令に責任のない上司となる。かかる上司の軍隊は2度と作らないことである。「戦犯者は日本軍全体の犠牲者です」³²⁾。このように述べている。「日本軍全体の犠牲者」という表現が際立つ。

元上官への反感を、再軍備の問題と関連づけながら述べた者もいる。北京裁判で裁かれた元憲兵少尉はこう指摘する。

新日本軍再建に対し

戦争中建軍の本義を云てしたる上級将校（立派な方も多々あつた）の戦犯摘発の進展に対する態度果してあれでよかつたのであらうか、再軍備云々せられある現在再建軍の上級将校の人達に方りては真に国家を部下を思ふ胆力と信念と責任感のある上司の採用に特に――留意方熱望す³³⁾。

上官たちの、「戦犯摘発の進展に対する態度」とはどのようなものだった

32) 元陸軍上等兵（1957）「戦争裁判事件調査票」。

33) 元憲兵少尉（年不明）「戦争裁判事件調査票」。

たのか、「調査票」には具体的な記載がない。だが、責任を十分に果たさない上官はもう懲り懲りだ、という意識が垣間みられる。他にも、かつての軍編成に鑑み、責任者としての幹部高級将校の反省を促したい（元憲兵少佐）、命令者たる軍司令官以下、隊長・分隊長などの将校が命令時のような厳然たる態度で責任をもってもらいたかった（元憲兵軍曹）といった声がみられる³⁴⁾。なかには、「現在の自衛隊には旧軍将校は絶対に入隊せしめない様願ひ度い」（元憲兵軍曹）と述べる者もあった³⁵⁾。戦犯裁判は、日本軍や「上官」のあり方を、根本から揺さぶるものだった。

(2) 戦争と戦争裁判の同時否定

戦争と裁判を抱き合わせの形で忌避する者が現れている点も重要である。

ある元海軍警部の裁判に対する意見は、次のようなものであった。戦争裁判は、勝者の敗者に対する報復である。住民の言はたとえ間違いであっても容認するが、被疑者、被告人の言はほとんど取り上げない。死刑囚と無期徒刑者には鉄鎖の足かせをはめて逃亡を防ぐ、往古の方法が用いられる。入浴は寒中といえども水浴のみである。食事は1日2回、極度の粗食だが財産のある者は差し入れを受けられる。結論として、戦争は今後絶対にあってはならず、なすべきではないが、戦争裁判も裁判国に反感をもたせるばかりで実益は得られないと考える³⁶⁾。以上のように述べている。裁判に対する強い反感と、戦争を否定する感情とが、同時に吐露されている。

34) 元憲兵少佐（年不明）「戦争裁判事件調査票」、元憲兵軍曹（1956）「戦争裁判事件調査票」。

35) 元憲兵軍曹（1957）「戦争裁判事件調査票」。

36) 元海軍警部（1961）「戦争裁判に関する調査票」。

こうした感情は、他の者にも共有されていた。広東裁判で追及された、元陸軍准尉はこうも述べている。幾多の将兵が責任を負わされ、上司も責任を負わされた。広東地区でも軍司令官以下将官多数の死刑執行が行われた。広東地区のみならず、中国各地でも同様だった。南方でも各地で死刑が執行された事実を耳にする。「戦争はあつてはならない」、また、「戦争裁判は今後あつては絶対にならない」³⁷⁾。

これら2つの所感をどう読むのか、その評価と解釈が難しい。「もう2度と戦犯にはなりたくないの、戦争はご免だ」（戦犯裁判の忌避に力点）という文脈なのか、あるいは「戦争も戦犯裁判も懲り懲りだ」（戦争と戦犯裁判を同じ程度に忌避）という文脈なのか、断片的な記述からは容易に判断できない。だが、いずれの文脈だとしても、裁判がその意義を否定されつつも、戦争のある種の「抑止力」としての効力をもった、と捉えることはできるかもしれない。だとすれば、それは極めて皮肉な裁判の「効果」であった。

(3) 国家補償の要求をめぐる

「調査票」には、服役期間を恩給に反映させてほしい、といった彼らの生活にかかわる要望が、数多く記載されている。生き延びた者を待っていたのは「生活との闘い」だった。喫緊の課題は生計の維持である。彼らは「戦犯」という存在をどう捉えていたのか。要求から、その一端が浮かび上がる。国家補償の要求には、2つの「意識」が内在していた。

1つは、上官の命令に従ったために戦犯となった、という見方である。ある元憲兵少佐は次のように述べる。

37) 元陸軍准尉（1969）「戦争裁判に関する調査票」。

何れも当然の職務行為或は上官の命による行為が犯罪となつたので「上官の命は直ちに朕が命を等る義と心得よ」とか命令の背後にある陸（海）軍刑法の抗命罪は何の意味のものか判らなくなつた。

命令審査権を許さない殊に下級の下士官や兵が真面目に命令を服行しその結果が戦犯となつた。国家が補償すべきものではないだろうか³⁸⁾。

天皇の問題が視野に入っていることが注目される。日本軍の命令系統にあった者が、自身の体験に根差しながら補償を求めてゆく様が窺える。彼にとって、戦犯となった原因は上官の命令にあり、その最終的な責任は、日本国家に帰するものであった、といえよう。「調査票」に、元上官への反感を記す者が続出したことを考えると、こうした国家補償の要求は広範な支持を得るものであったと考えられる。戦犯のなかには、裁判への不満と同時に、「軍の犠牲」（元憲兵軍曹）という意識が流れていたのである³⁹⁾。

もう1つは、「日本人としての犠牲」という意識である。例えば、自衛隊に旧軍将校を入隊させないでほしいと発言していた先の元憲兵軍曹は、自分個人としてではなく「日本人として〔の〕犠牲的服役である」との認識にたち、「戦犯者には恩給法を一部改正して期間中の加算を以つて報ゆることを具申する」としている⁴⁰⁾。「国家的犠牲者」である戦犯に対する「国家的処遇」は果たしてこれでよいのか、割り切れない感情をもっている（元憲兵少尉）、という所感を記載した者もあった⁴¹⁾。

また、こうした議論のなかには、自分は日本の人びとを代表して服役し

38) 元憲兵少佐（1962）「戦争裁判に関する調査票」。

39) 元憲兵軍曹（1956）「戦争裁判事件調査票」。

40) 元憲兵軍曹（1957）「戦争裁判事件調査票」。

41) 元憲兵少尉（年不明）「戦争裁判事件調査票」。

たのだ、という意味を示したものもある。漢口裁判で10年の刑を受けた、元憲兵軍曹は、「戦犯者は戦争責任者として、八千万国民より代表者として其の責を負ふたるものなれば何等かの恩典あらん事を要望す」との考えを記している⁴²⁾。

「軍の犠牲」、「国家の犠牲」——。彼らの要求は、戦犯という存在を生み出した、日本の戦争と軍隊、そして「戦後」のあり方を問うたものであった。

では、彼ら自身の戦争責任の問題は、どのように捉えられていたのか。「調査票」で、自身の戦争責任に言及した者は少ない。記載されているのは、「勿論戦争と云ふものに対して日本人として責任を痛感して居る」（元憲兵曹長）、「敗戦国民として日本人的責任を追及されたのなら〔中略〕日本人である以上止むを得ません」（元憲兵曹長）、といった簡潔なものである⁴³⁾。戦争や戦争責任と向き合い、思索してゆくには、出所後を含めた長い時間が必要だった、ということなのかもしれない。「戦争—戦犯裁判—服役—出所後の生活—現在」。戦犯の問題は、こうした長い時間のなかで考える必要がある。

（4）「被害者の声」との接点

戦犯裁判は、中国の人のびとの声と戦犯とを結びつける「場」ともなった。戦犯たちは、中国側の厳しい追及の背景に、膨大な中国の戦争被害があるということを、裁判で否認なしに突きつけられることになった。例えば、ある元領事は、徐州裁判で通訳者が語ったことを詳しく記述している。

42) 元憲兵軍曹（1956）「戦争裁判事件調査票」。

43) 元憲兵曹長（1956）「戦争裁判事件調査票」、元憲兵曹長（1957）「戦争裁判事件調査票」。

戦時中、家を焼かれ、妻を奪われ、親子離散して奥地へ奥地へと移住を余儀なくされた中国国民の労苦は日本人に対する深い恨みになっている。中日両国民が再び手を握るためには新しい政府に依つて日本人何千かを死刑にして民衆に代つて仇をとつてやるのが民心把握上必要であるし将来の中日提携を早める一策であると当時の通訳（中佐）だった中国人が我々に洩らした言葉である。裁判当局者にこの考えを持つた者が居たと思われる⁴⁴⁾。

通訳者の言にふれ、彼がどのように感じたのか、「調査票」には記されていない。だが、「調査票」でかなり詳しく言及している点からして、このことが彼に強い印象を残す出来事であったことが窺える。

裁判を、近代日本の中国政策と関連づける視点も出されていた。ある元海軍大佐は、次のように論じている。

従来我日本の過去の海外進出を見るに先づ現地の波乱に乗じて軍隊を進駐させ軍政を敷き多大の物資、資金を乱費し現地の生産々業を独占せんとする型にはまったような方式で、特に支那大陸にあっては歴史的に数限りなくこれが繰り返されて来た。日本の対支政策の基調であった日支親善共存共栄も名ばかりの政略のお題目に過ぎずしてその内実は遠くこの理想に背反し進駐軍は作戦に際し多量の物資の掠奪、村落の焼去、村民に対する各種の危害を与へ（以上某親日中国人の言）又続いて押すな――と無差別に渡支した日本人〔中略〕〔は〕軍にも劣らぬ経済搾取を行った。支那民族は之に対し報復手段の何等講ずる術なく臥薪嘗胆この日の到来を待っていたが日本の敗戦は宛も好機と

44) 元在徐州日本総領事館領事（1963）「戦争裁判に関する調査票」。

ばかり戦犯制を利用した〔中略〕私は茲に今次の戦犯者の代弁をする意味ではないが私達嘗ての戦犯者は謂わばこの日本積年の悪行動に対する支那側からの報復行為に対し日本国民を代表して受刑したものであると確信し自らを慰めている次第であります⁴⁵⁾。

この元大佐の指摘で重要なことは、裁判が「報復行為」であるという指摘に留まらず、その背景——中国の「臥薪嘗胆」の歴史——を視野に収めて議論している、ということである。「日本積年の悪行動」という一節も、単なる戦犯裁判の全面否定論とは一線を画している。

裁判は、日本の戦争によって被害を受けた、「被害者の視点」が、被告人の視野に少しずつ入ってゆく、きっかけ作りの役割をもっていたのかもしれない⁴⁶⁾。

(5) 思索を阻むもの

とはいえ、服役者の認識の深化を阻む、様々な問題も存在していた。

「調査票」で度々言及されているのが、収容所内での待遇の問題である。特に、食事に対する不満は強かった。「北京拘置所デハ豚同様ノ食事デ病死シタ者モ十一名」あった（元憲兵少佐）、「北京拘置所生活の待遇は全く人間的待遇でなく特に食事は非人道的なもので北京拘留生活の人達には忘れる事の出来ないものです」（元北支那方面軍嘱託・合作社顧問）といった記

45) 元海軍大佐（年不明）「戦争裁判に関する調査票」。

46) なお、蒋介石の戦犯処罰方針を評価する意見も出されている。例えば、ある元憲兵中佐は次のように語っている。「蒋介石は『怨に報ゆるに徳を以てせよ』と訓示し、平和条約締結と同時に各国に先んじて戦犯を解消してしまつたし又嘗つての恩師■大將に対する処遇などにも心を配つたときいている。勝者として立派な態度で学ぶべきものがあると思う」（元憲兵中佐（1965）「戦争裁判に関する調査票」）。「■」は公文書館側の黒塗りである。

載が目立つ⁴⁷⁾。収容所に視察が入ると、一時的に待遇が改善されることもあった。これも服役者の反感をかっていいる。ある元開拓団員は、こう述べる。「視察官が来ると食事、夜具、部屋、等を良くして視察官に見せ〔視察官が〕帰ると又前の悪さに帰る。其の様なトリックを使ふ為戦犯者皆激怒して居つた」⁴⁸⁾。

弁護や通訳といった、被告人の弁護体制をめぐる問題もあった。徐州裁判で追及された、元憲兵上等兵は、「弁護士のでたらめ」という項目を作り、詳しく当時の状況を振り返る。

徐州戦犯は一律に中国政府の官選弁護士であつた。したがつて事件に関する打合せなどは一度もなかつた。又通訳なるものもよく日本語を解せず。我々はもちろん中国語は語れず裁判などに行つてもなにがなんだかわからず手ぶり□□ぶりの状態なり。ましてや弁護士の真意などは少しもなく時には審判官の味方などして弁護士などいない方がよかつた程なり⁴⁹⁾。〔「□」は判読不能箇所〕

充分な通訳と弁護もなく、裁判以前の問題だった。これが、元上等兵の率直な感想だったのだろう。「裁判などに行つてもなにがなんだかわからず」との一節は、彼らが裁判に向き合う基本的な条件を、充分に与えられていなかったことを示している。ほかにも、「通訳ハ日本語モ満足ニ解セザル女通訳ナルヲ以テ一方的ニ処断セラル」(元憲兵少尉)、「被告ガ公判中三十分位申弁シタノニ通訳ガ何ト通訳シタノカ半紙ニ書記ハ一行半位シカ

47) 元憲兵少佐(年不明)「戦争裁判事件調査票」, 元北支那方面軍嘱託・合作社顧問(1956)「戦争裁判事件調査票」。

48) 元開拓団員(1957)「戦争裁判事件調査票」。

49) 元憲兵上等兵(1956)「戦争裁判事件調査票」。

書イテナカツタ」(元陸軍予備伍長)⁵⁰⁾、といった指摘がある。

様々な形で行われた虐待も深刻だった。北京裁判に付された、元汪兆銘政府職員によれば、以下のような事実があったという。

調書に署名させず又被告に読み聞かせない。陳述が終ると書記が白紙に被告の姓名を記入しその下に押印を押せと云ふのでこれを拒絶したら両側の憲兵が来て被告の手を捉えて強制押印させた毎回これであった⁵¹⁾。

これは、裁判記録には残っていない史実だろう。「拷問云々で裁判をしながら訊問中に殴る、ける全く非人道的な取扱いであつた」(元憲兵兵長)との感想を抱いた者もいた⁵²⁾。戦犯への虐待は、裁く者への疑いを抱かせ、彼らの思索を阻むものであったと考えられる。食事、弁護、虐待——。「不当な裁き」という彼らの見方は、「裁き」に含まれていた、こうした問題群のなかで、解釈される必要がある。

一方、裁かれた側の意識にも、重大な問題が孕まれていた。即ち、他のアジアへの優越意識や蔑視が、裁判や収容所生活を経ても、根強く残存していたのである⁵³⁾。広東裁判で逮捕者への「酷刑」にかんする責任を追及された、元憲兵曹長の「調査票」には、次のような記述がある。

私等三名〔戦犯裁判で一緒に追及された三人の被告人〕は身分が当

50) 元憲兵少尉(1956)「戦争裁判事件調査票」、元陸軍予備伍長(1957)「戦争裁判事件調査票」。

51) 元汪兆銘政府職員(1956)「戦争裁判事件調査票」。

52) 元憲兵兵長(1956)「戦争裁判事件調査票」。

53) 戦後日本社会における、他のアジアへの優越意識、「帝国意識」の残存については、吉見(1987, 2014)が詳しく検討している。

時陸軍憲兵上等兵で然も管轄が広州中央憲兵隊附で本件の様な場所（船付場）は憲兵隊本部（特高課関係で仕事しありたり）関係で又事件も思想と諜報活動関係で中立地、占領地、奥地（未占領地）の連繫で一小地区の憲兵隊の扱ふ事件とも自ら異つてゐます。然し疑問を生じる点は日本人及び当時の憲兵隊の人なら直ぐ判断もその問題の解決するポイントは解りますが相手は中国人であり智能的に劣り戦勝国が民衆の輿論に答え永い占領間の報復裁判に主要部分（特高課の人々・日本を知る理性ある人）なく唯永年勤続（一地域）した私等三名を中心に訴えたから双方とも訳の解らないすじの通らない告訴した事件より外れた裁判で終つて仕舞ひました⁵⁴⁾。

日本の敗戦から、約10年が経過した時期に書かれた「調査票」である。敗戦から年月を経ても、戦前以来の中国観が、根強く残存していたことが分かる。さらに、「小国」への強い不信任を書きつけた者もあった。上海裁判で、捕虜虐待の責任を問われた元陸軍大佐（元上海俘虜収容所長・上海敵国人抑留所長）は、「所見」の項目で、「戦争裁判は平時より厳正崇高なる国際的機関として厳存せしむること」と記入した上で、「法廷を事件発生地統治国のみに委する事は当該国の法務組織、法の運用能力等より考慮する時は現代の如く群小未開国等の存在多き場合頗将来が危惧せらるるのである」、と書いている⁵⁵⁾。

最大の被害国である中国による裁き——。その裁きを受けてもなお、「侵略された側の視点」を受け止めきれない者が存在していたのである。こうした「変わらざる意識」は、戦犯の裁判への拒否感に拍車をかけたと考えられる。

54) 元憲兵曹長（1956）「戦争裁判事件調査票」。

55) 元陸軍大佐（1964）「戦争裁判に関する調査票」。

おわりに

ここで、本稿で明らかになったことを振り返っておこう。

第1に、戦犯は、裁判そのものへの反発と同時に、「戦犯」という存在を生み出した日本軍、あるいは、責任逃れをした元上官たちへの怒り・疑問を抱えていた。裁判には、日本軍という「組織」を問い直す、1つの「契機」が存在していたといえよう。また、彼らの声は、国際法運用の問題など、日中戦争の重要な一断面を、浮かび上がらせるものでもあった。

第2に、戦犯の「不当な裁き」「一方的な裁判」という主張を、解釈する上で重要な点として、彼らが収容中に受けた虐待や待遇の問題がある。弁護体制の不備も重なったことで、戦犯からみると、「裁判以前の問題」という状況が生じていた。こうした裁き自体がもつ問題点は、戦犯が裁判や自身の戦争責任の問題と向き合う契機を奪っていたと考えられる。

第3に、裁判で、「被害者の声」と対峙せざるを得ない状況のなか、限界を孕みつつ、そして少しずつではあるが、中国の人びとの存在が視野に入り始めていた者が存在していた。なかには、戦犯になった自身の境遇と、戦時中の中国の人びととを重ね合わせる者や、日本の対中国政策の過程を再考する者もあった。

だが、彼らの思索の過程には、大きな問題が横たわることになった。第4は、彼らの「変わらざる認識」の問題である。戦争や裁判を経ても、彼らの天皇・天皇制への信仰は揺らがなかった。このため、日中友好や世界平和が、天皇制の存置を前提とした議論として展開されることになったのである。これは、「被害をこうむった側」の視点を欠いた「提携論」であったといえる。中国の裁きを受けてもなお、他のアジアへの優越意識をもつ者も存在していた。

第5は、自身の戦争責任の問題が、深く問われることがほとんどなかっ

た、ということである。この点については、本稿での分析内容と、戦犯の「認罪」を促したことで知られる、中華人民共和国の裁判との本格的な比較検討が必要である。

以上のように、中国による裁きを受けた人びとの意識には、多くの特徴や問題点が存在した。これらは、対中国観やアジア認識など、戦後日本社会における戦争責任論や「日中友好」をめぐる議論に、いかなる「欠落」や問題点が生じていたのか、その一端を示すものでもあるといえよう。こうした欠落や問題が、現在の日本や世界にもありはしないか。彼らの体験を踏まえ、問い直してゆく必要がある。

こうした彼らの意識が、その後、どのように変容したのか、あるいは、変わらなかったのか。特に、「侵略された側」の視点を充分に含み込みぬき、日中の「友好」や「親善」がその後も語られていたとしたら、それは、戦後日中関係史、あるいは日本の戦争責任論の文脈において、いかなる意味と問題性をもつのだろうか。こうした検討課題については、稿を改めて論じることにはしたい。

参考文献

- 栗屋憲太郎（1989）『東京裁判論』大月書店。
- 栗屋憲太郎（2006）『東京裁判への道』上・下巻、講談社。
- 伊香俊哉（2007）『満州事変から日中全面戦争へ』吉川弘文館。
- 伊香俊哉（2014）『戦争はどう記憶されるか—日中両国の共鳴と相剋』柏書房。
- 宇田川幸大（2012）『戦犯の『戦後』—戦犯の戦争責任観・戦争観・戦後社会観—』『戦争責任研究』第78号、22-31頁。
- 宇田川幸大（2016）「序列化された戦争被害—東京裁判の審理と『アジア』」『年報・日本現代史』第21号、69-103頁。
- 内海愛子（2005）『日本軍の捕虜政策』青木書店。
- 内海愛子・宇田川幸大・カプリオ マーク編集・解説（2012年）『東京裁判—捕虜関係資料』全3巻、現代史料出版。
- 内海愛子（2015）『朝鮮人BC級戦犯の記録』岩波書店、2015年。

- 内海愛子・宇田川幸大（2016）「戦争と裁き—オーストラリア裁判と被告人」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』第13号，大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター，2-8頁。
- 大沼保昭（1975）『戦争責任論序説—「平和に対する罪」の形成過程におけるイデオロギー性と拘束性』東京大学出版会。
- 清水正義（2011）『「人道に対する罪」の誕生—ニュルンベルク裁判の成立をめぐる』丸善プラネット。
- 巢鴨遺書編纂会編（1953）『世紀の遺書』巢鴨遺書編纂会刊行事務所。（1984年に講談社から復刻版。）
- 宋志勇（1993）「終戦前後における中国の対日政策—戦争犯罪裁判を中心に」『史苑』第54巻第1号，63-80頁。
- 宋志勇（2016）「中国における東京裁判の研究動向」『年報・日本現代史』第21号，171-189頁。
- 鶴見和子（1968）「極東国際軍事裁判—旧日本軍人の非転向と転向」『思想』第530号，11-36頁。
- 東京裁判ハンドブック編集委員会編（1989）『東京裁判ハンドブック』青木書店。
- 戸谷由麻（2008）『東京裁判—第二次大戦後の法と正義の追求』みすず書房。
- 豊田隈雄（1986）『戦争裁判余録』泰生社。
- 豊田雅幸（2009）「中国の対日戦犯処理政策—厳罰主義から『寛大政策』へ」『史苑』第69号，15-45頁。
- 難波ちづる（2011）「第二次世界大戦後におけるフランスのインドシナ復帰—戦時期の清算と対日本人戦犯裁判」『三田学会雑誌』Vol. 104, No. 2, 27-54頁。
- 法務省司法法制調査部『BC級戦争裁判事件調査票・英国』同調査部，国立公文書館所蔵。
- 法務省司法法制調査部『BC級戦争裁判事件調査票・中国』同調査部，国立公文書館所蔵。
- 法務省司法法制調査部『中国戦争裁判概見表』同調査部，国立公文書館所蔵。
- 林博史（2005）『BC級戦犯裁判』岩波書店。
- 林博史（2010）『戦犯裁判の研究—戦犯裁判政策の形成から東京裁判・BC級裁判まで』勉誠出版。
- 日暮吉延（2002）『東京裁判の国際関係—国際政治における権力と規範』木鐸社。
- 吉田裕（1992）『昭和天皇の終戦史』岩波書店。
- 吉見義明（1987）『草の根のファシズム—日本民衆の戦争体験』東京大学出版会。
- 吉見義明（2014）『焼跡からのデモクラシー—草の根の占領期体験』上・下，岩波書店。

劉傑（2000）『漢奸裁判—対日協力者を襲った運命』中央公論新社。

和田英穂（2001）「被侵略国による対日戦争犯罪裁判—国民政府が行った戦犯裁判の特徴」『中国研究月報』第645号，17-31頁。